

ネット社会という船に乗って 62

「一人暮らしがしたい」にも適齢期がある？

文 佐渡島庸平

text by Yohei Sadoshima

中学2年生の長男が、家を出て一人暮らしをした
いと言いだした。学校を辞めて、学費分を一人暮らしに充てたいという。それを聞いた時に、僕は即座に否定した。親から干渉されたくないだけで、逃避的な意思決定だと。前向きな意思決定ではなく、より墮落していきただけだと僕は感じた。けれども数日経って、僕自身が矛盾しているように感じた。子育ては子どもが自立するように促す行為である。大学生が社会人になったら一人暮らしをすることを求める。それが4、5年早くやってきただけである。

現実的に可能かどうかは別として、一人暮らしをしたいという欲望を息子が持ったことは、成長の証として喜ばしいことではないか。先日、長男が僕と身長が同じになった時は「このあとは、僕を超えていくんだな」と、喜ばしいこととして写真を撮ったのに、なぜ同じように反応できなかったのだろうか。

すると、今度は数十万を貸してほしいと訴えてきた。中学生でもできるビジネスを考えたらしい。電化製品はリアルな店舗だと在庫を処分するために、ネットでの相場よりも安く売っているものが日々出る。それを足繁く通って見つけ、ネットで売る。活動量と売り上げが比例するから、努力すれば確実に

に利益が出る。それで一人暮らしをするための資金を稼ぐという考えらしい。僕が中学生の時には絶対に思いつかなかった発想だ。YouTubeやSNSからの情報によって、学校の同級生からは得ることがない知識を手に入れることができるようになった。

子どもには、自分が予想できる範囲の中でベストな状態になることをついつい期待してしまう。予想外の行動をしてきた時、それを瞬間的に否定してしまう。子どもは、親の言うことを聞くべきという思想が、僕に染み込んでしまっているのだろう。

子育てというのは、自分の器の大きさに気づかせてくれることが多い。否定するのはやめようと思っただものの、長男とどう話し合っていけばいいのか、まだよくわからないままだ。子どもとの話し合いは、親の言うことを理解させる方法にばかり意識が行ってしまう。子どもの視点からは、何が見えていのか、傾聴がなかなかできない。傾聴して子どもの視点を理解できてこそ、子育ての楽しさだと頭ではわかっていても。



Profile

株式会社コルク 代表取締役
2002年講談社入社。週刊モーニング編集部にて、『ドラゴン桜』（三田紀房）、『働きマン』（安野モヨコ）、『宇宙兄弟』（小山宙哉）などの編集を担当する。2012年講談社退社後、クリエイターのエージェント会社、コルクを創業。著名作家陣とエージェント契約を結び、作品編集、著作権管理、ファンコミュニティ形成・運営などを行う。従来の出版流通の形のあるインターネット時代のエンターテインメントのモデル構築を目指している。